

バリアフリーについて

キーワード

- 1 「一人一人を、人として大切にしていける社会」の実現
- 2 バリアは、物理的なものだけではない。制度的、心理的等なバリアが存在する。
- 3 バリア=ハンディを持っている人は、障害者だけではない。外国人、ニート、ホームレス等幅広く考えていかなければならない。
- 4 障害者は決して他人事ではない。病気、事故、高齢化等々様々な原因でだれもがなりうる事である。
- 5 私たちは、バリアに対して、余りに無関心、知識がないのではないか。
- 6 障害そのものは無くすことはできないが、障害によるハンディ=バリアは対応できるのではないか。

<考え方>

1 「一人一人を、人として大切にしていける社会」

障害があるから、外国人だから、働いていないから、貧しいから、病気だから、等々の原因だけで、社会に参加できない、権利を行使できないことがあってはいけない。どんな境遇にある人でも生きる意味、価値は同じである。

人間お互い完全と言うことはないのだから補い合うことが大切

<現状・課題>

2 バリアとは 物理的なものと捉えがち

例 例えば視覚障害者が大学に通うためには、設備的な対応だけでなく、例えば試験・授業で点字図書を用意するなど制度的な保証も必要。

精神障害者の就労を進めるためには、精神障害者への正しい理解といった、心理的な対応も考えなければならない 等々

「かわいそう」と思う気持ちは大事だが、対等の立場で考えないと、バリアーになることも。

3 バリア=ハンディは障害者だけではない。

障害者はその障害によって、教育、就労、生活等を行う際に様々な困難がある。

同様に、外国人は言葉のハンディ、ホームレスは住所要件の欠如、ニートは教育の欠如により、就労等社会参加が阻まれていないか。

4 障害者は他人事ではない。

先天的に障害を持っている割合は低い。病気や事故、高齢化により障害者となる方が大部分である。

また、ホームレス等は、失職、破産、病気等の要因で追い込まれる。

5 私たちはバリアに関して余りに無関心、知識がないのではないか。

障害者の実態 障害者の就労 精神障害者 ホームレス ニート 等々、私たちが日頃常識と思っていることと、実態には余りに乖離がある。

事実を正確に知らないことで、問題を放置していないか。

さらに、偏見を持つことで社会的な排除につながり、結果として問題を悪化させていないか。

< 解決・改善の方向性 >

6 障害そのものは無くすることはできないが、障害によるハンディ = バリアは対応できるのではないか。

「不便ではあるが、不幸ではない」 障害者が障害によるハンディ = バリアを克服できる手段・対応を考えていくのが社会の務め = 福祉

解決策(案)

(1) 知識を得ること

・教育、生涯学習、普及啓発活動等、様々な機会を捉えて障害（ハンディ）に対する知識を得る機会を作る。

・日々の交流の中から体験することが大事。学校、職場、生活の場を通じて、体験交流する場を設ける。

・施設公開、障害者インターシップといった取り組みは非常に効果的。

(2) 教育の重要性

・小・中学校の段階から、障害（ハンディ）に対する正しい知識を学ぶ。

・障害者との交流、就労等社会体験の実施

(3) 制度・仕組みの構築

・取り組みへの考え方

「一人一人を人として大切に社会」

排除するのではなく、話し合い、受け入れていく中での問題解決を考える。

・住民

身近な、できるところから始める。

- ・福祉施設・保護者
障害者の自立を支える視点での活動へ
- ・企業
就労等、社会的義務を果たす努力を求め。
- ・行政
制度を作る中心的な担い手
交通機関、施設のバリアフリーの推進、整備
就労等、社会的自立への支援
総合的な窓口、住民等と一緒に問題を取り組む姿勢を